

千歳倶楽部と下田歌子の関わりに関する一考察

— 岐阜県恵那市岩村町における新出資料の下田歌子書幅と千歳倶楽部に関する調査 —

愛甲 晴美

はじめに

本稿は、下田歌子（以下 下田）の生誕地、岐阜県恵那市岩村町において、新出資料の下田直筆書幅二点の箱書によつて、その存在が明らかとなった千歳倶楽部に関する調査と、下田との関係についての一考察である。

調査した書幅の一点は、岩村町本町地区にあつた大徳屋という旅館を営んでいた渡会家に所蔵されているものである。現在旅館は経営されていないが、大徳屋には昭和十年（一九三五）、下田の顕彰碑除幕式の際に、下田に同行した同窓生や生徒が宿泊したことが記録として残っている。^{注1} 書幅を「^{注2}所蔵の渡会加代子氏（後述する箱書に記名のある渡會誠治氏は大徳屋の当主であり、加代子氏は誠治氏の御令孫）によれば、この書幅については、下田の書幅であるということ以外詳しい来歴は伝えられていないとのことであつた。

もう一点は、下田歌子記念女性総合研究所客員研究員・実践女子

学園岩村親善大使の鈴木隆一氏（後述する箱書に記名のある鈴木萬一郎氏の御令孫）ご所蔵の書幅である。同書幅も来歴は不明とのことであつた。今回の調査によりこの二点の書幅は軸箱、箱表の題字、書幅の表装がほぼ同一であることが判明した。各々箱書の内容と、書幅に書かれた歌は異なるが、いずれの箱書も「千歳倶楽部」という団体に関わる内容であり、いずれの箱書にも、大正二年一月という記載が認められた。二点の書幅は下田と千歳倶楽部が何らかの関わりを持つていたことを示す資料といえる。

これまで、下田が明治四年に上京した後の岩村との関わりについては、明治二十一年、大正十年、昭和十年の三度の下田の岩村来訪が知られる。個人間での交流も書簡等に見られるが、その全貌についての調査はされていない。千歳倶楽部の存在も、下田との関係も不明であつた。

下田と岩村の人々との交流を検証していくことは、故郷岩村と下田との関係を明らかにするうえで重要なことと考えられ、今回の新出資料は其中で、大正二年頃の交流の一端を示すものといえる。下田との関わりを明らかにするためにも、この「千歳俱樂部」がどのような団体であったのか、また、箱書にある「巖邑實業補學校寄宿舎」とは何かを調査し、なぜ下田歌子の書幅であったのかなどの点について、岩村での聞き取り調査と資料収集を踏まえて考察した。

本稿は、1において、前述二点の書幅の書誌を示す。2では、千歳俱樂部がどのような団体であったかについて、聞き取り調査と資料から検証する。3では、「巖邑實業補學校寄宿舎」とは何かを明らかにし、岩村の学校変遷の中での位置づけを示す。4で、下田と千歳俱樂部との関係をつないだ可能性のある人物について考察する。5では、書幅に書かれた下田の歌について触れる。

なお、地名の「岩村」については資料により表記が異なる場合が見られたほか、人物名については資料及び聞き取りを行った御親族の現在の苗字の表記との間に差異が見られた。調査を通じて資料間における「岩村」は表記が異なるものの、いずれも現在の岐阜県恵那市の岩村を指すものと結論づけられた。また、資料の表記と御親族の現在の苗字表記は異なるものの、変更を経て同一の姓を指すことが確認できた。以上のことから本調査報告においては、資料中の記載内容に関しては原則として各資料の表記に従うこととする。

1 書幅について

まず、二点の書幅の書誌について次に記す。

① 書幅 渡会加代子氏所蔵(以下 書幅①)

箱蓋(表)

「下田歌子先生書 壹幅」

箱蓋(裏)

「我千歳俱樂部曩建設巖邑實業補學校寄宿舎時
渡會誠治君督工監業速致落成矣本會茲多其勞
為紀念贈呈之焉 維時大正二年一月」(印「千歳俱樂部」)

表装

天地及び一文字 絹地白茶 一文字 信夫・緞子

中廻 絹地水浅葱 草花唐草文・緞子

本紙

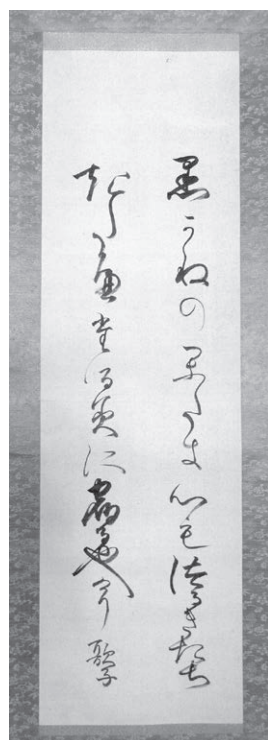
絹本墨書 一幅

法量 表具寸法 縦一九七・〇cm 幅四五・三cm

本紙寸法 縦一一・〇cm 幅三三・〇cm

黒かねのかたき心もつるきたち／きたへたるみに宿る也けり 歌子

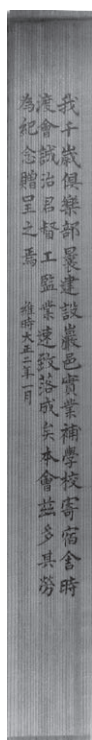
書幅① 本紙



箱蓋(表)



箱蓋(表)



② 書幅 鈴木隆一氏所蔵(以下 書幅②)

箱蓋(表)

「下田歌子先生書 壹幅」

箱蓋(裏)

「寄附者 千歳俱樂部員 渡曾誠治 中根政造 小出熊藏

石橋新助 吉村彦七 倉地作藏 平野榮治

荻野萬助 高柳輝 矢野亥藏 鈴木萬一郎

渡曾源藏 田中説二郎 松井鐵治 杉本宮藏

(印「千歳俱樂部」)

箱表(底面)

「維時大正二年一月十一日寄附」

表装

天地及び一文字 絹地白茶 一文字 信夫・綴子

中廻 絹地水浅葱 草花唐草文・綴子

本紙

絹本墨書 一幅

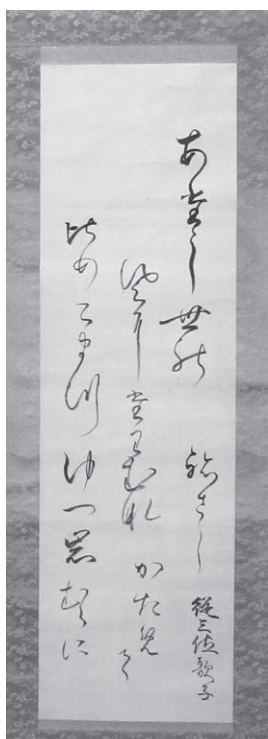
法量 表装寸法 縦一九六・〇 cm 幅四五・〇 cm

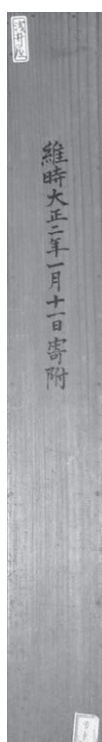
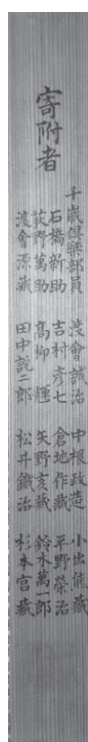
本紙寸法 縦一一〇・八 cm 幅三七・八 cm

あたし世の／風にたわむな／ひめこまつゆつ岩むらに／ねさし／かためて

從三位歌子

書幅② 本紙





2 「千歳倶楽部」について

この二点の箱書から、「千歳倶楽部」には少なくとも記名の十五名が所属していること、千歳倶楽部が「巖邑實業補學校寄宿舎」建設に携わったこと、その中で、渡曾誠治氏が工事の監督などを行なったことがわかる。巖邑實業補學校寄宿舎は後述する「巖邑実業補習學校女子部寄宿舎」のことである。

聞き取り調査の過程で、松井鐵治氏の御親族の松井みさ子氏より、千歳倶楽部創立五周年の記念写真と倶楽部員が旅行先で写したと思われる集合写真の情報を得た。記念写真は岩村の旅館水半別館の庭で撮影されたものである。なお、水半別館は昭和十年の下田の顕彰碑除幕式の際に、下田ほか一部の同行者が宿泊した

旅館である。岩村では最も広い座敷を持つ旅館で、冠婚葬祭等に利用される格式ある旅館であつた。写真には十五名の男性が写っており、裏面に「本俱樂部創設滿五週年紀念トシテ寫セン各員ニ頒ツ」とあり、写真の人物の配列に対応して名前が記されていた。この十五名は、書幅②の箱書にある人名と幾分表記の違いはあるものの同一であつた。末尾には「大正三年三月」とあり、箱書下部にある朱文印と同じ印も認められた。旅先での写真は、台紙に「信陽上諏訪町 古田寫眞館」とあり、「湖畔 鷺乃湯」と書かれた石柱とともに、十四名が同じ浴衣姿で写つたものである。

千歳倶楽部員について、御親族などからの聞き取りとその後の調査で得られた内容は次の通りである。

* 記載は書幅②箱書の記名順とする。氏名、生没年、(大正二年の推定年齢)、当時の所在地、職業(店名、屋号)、その他の順で示した。所在地の名称は「大正の町並み聞き取り図」(以下町並み図)を参照した。ただし町並み図に記載のない殿町^{あざ}は字で記した。

・渡曾誠治(わたらいせいじ) 明治十四年(一八八二)一、(三十二歳)、岩村町本町、旅館業(大徳屋旅館)、併せて敷地内に纖維工場も経営、昭和五年から二度にわたって、岩村町助役を務める(以下、町長、助役、町会議員、消防団長については『岩村

町史』による。

・中根政造（なかねまさぞう）明治八年（一八七五）―昭和二十三年（一九四八）、（三十八歳）、岩村町本町、呉服商（土田屋（どたや）呉服店）、土田屋は明治三十四年濃明銀行岩村支店、明治四十一年岩村銀行設立の際にも大株主であった。

・小出熊藏（こいでくまぞう）明治十二年（一八七九）―昭和四十五年（一九七〇）、（三十四歳）、岩村町本町、米穀肥料商^{注3}。昭和九年に岩村町助役、同二十四年に岩村町長を務めており、昭和十年岩村に建立された「下田歌子先生顕彰碑」の敷地は熊藏氏より寄贈された。

・平野榮治（ひらのえいじ）年齢は松井鐵治氏とほぼ同年代（三十六歳前後）、岩村町本町、履物商（平野屋履物店）。

・荻野萬助（おぎのまんすけ）明治十七年（一八八四）―昭和三十八年（一九六三）、（二十九歳）、岩村町殿町、文房具店経営。

・高柳輝（たかやなぎあきら）明治十九年（一八八六）―昭和四十八年（一九七三）、（二十七歳）、岩村町西町、薬種商（高柳司生堂）、薬剤師として勤めたのち、明治四十四年に薬局を開業、大正十一年町会議員、戦時中の警防団長、消防団長、士族会会長も務めた。

・鈴木萬一郎（すずきまんいちろう）明治九年（一八七六）―昭和三十四年（一九五九）、（三十七歳）、岩村町本町、呉服商（浅井屋）。

・渡曾源藏（わたらいげんぞう）明治二十二年（一八八九）―昭和

二十七年（一九五二）、（二十四歳）、岩村町本町、酒造業（岩村醸造）、大正十四年より岩村町助役、消防団長を務める。

・松井鐵治（まついてつじ）明治十年前後―昭和十七年（一九四二）十二月、（三十六歳前後）、岩村町本町、筆筒店（たんすや）（京屋）。

・杉本宮藏（すぎもとみやぞう）明治八年頃―、（三十八歳前後）、岩村町一色、農業、なお、杉本家の縁戚が岩村町西町で「橋本屋」という店を営み、宮藏も出入りしていた可能性があるとのことである。明治二十六年より岩村町会議員、消防団長を務める。

『岐阜縣下 特設電話番號簿 大正九年十月十五日現在』^{注4}には、

恵那郡岩村町本町の電話交換加入者名に合名会社土田屋呉服店、小出熊藏（米穀肥料商）、大徳屋 渡曾源三（酒造業）、高柳輝（薬種商）、渡曾同文社 渡曾誠治（印刷業兼旅館）とある。大正九年の岩村町本町の電話は四十九番までとなっており、すでにその中に千歳俱樂部員が五人入っていることは、彼らが有力者であったことを示している。同昭和二年版では、先の五名に加えて浅井屋鈴木萬一郎（呉服商）、石橋新助（酒造業）、坂井屋 吉村彦七（繭絲菓子商）の記載がある。^{注5}

「大正七年岩村商店図の上町、中町（本町通り）」^{注6}には、岩村の本通り土田屋呉服店の向かい側少し下ったところに、吉村彦七の名があり、町並み図でも、ほぼ同様の位置に「菓子製造販売坂井

「屋」の名が見えることから、吉村彦七は岩村町本町で菓子製造販売（坂井屋）の当主と考えられる。

前出の商店図は印刷が不鮮明だが、下町（西町、新町）の図に、「夕 田中説次郎商店」と読める店がある。岩村の郷土史研究家の故西尾精二氏より、田中は引き札にある田中大治商店であろうとのご教示をいただいた。引き札にある所在地は西町一となっており、町並み図には西町一丁目に「田中屋 八百屋」とある。田中説二郎は青果店（田中屋）の当主と考えられる。

町並み図には、そのほか酒釀造④（岩村釀造）の向かいに、〈新石橋宅 酒蔵とある。石橋新助は〈新の当主で、酒蔵ではなく、酒販売業であつたとの情報を得た。そのほか小出肥料米こく、呉服浅井屋、土田屋呉服、平野屋下駄はきもの、京屋タンス塗物、旅館大徳屋、高柳薬店司生堂の名が見え、聞き取りによって書かれた図ではあるが、凡その所在地がわかる。なお、西町には「灯油・呉服橋本屋（杉本）」との記載があるので、杉本宮蔵の縁戚が営んだ店と考えられる。

倉地作蔵は前出の集合写真裏の記名が作三とあり、本町で古物商を経営していたとの情報を得た。

十五名すべての倶楽部員に関する情報を得られたわけではないので断定はできないが、千歳倶楽部は、そのほとんどが岩村町本町を中心とした地域で主に商売に携わり、年齢も明治末期から大正初年頃に二十代から三十代の、若い当主による団体であつたと考えられる。そのような仲間で結成され、岩村の発展のために、

一つの社会貢献事業として、巖邑実業補習学校女子部寄宿舎建設が行われたのではないかと推測される。

3 「巖邑実業補習学校寄宿舎」について

書幅①の箱書から、この寄宿舎の建設が大正二年一月には終わっていたことが確認できた。「巖邑実業補習学校寄宿舎」及び記載の年月から、この寄宿舎は、明治三十六年（一九〇三）岩村に改設した巖邑実業補習学校の女子部が、大正元年（一九一二）十二月に落成した寄宿舎と考えられる。この女子部寄宿舎は、恵南実科女学校の母体となつた。岩村の女子教育機関の変遷については大橋和華（一九九六）によって整理されている。

ここでは明治以降の岩村における学校の変遷図（図1）をもとに、巖邑実業補習学校女子部寄宿舎設置の経緯とその後の変遷を見ていく。

明治以降の岩村における学校変遷図

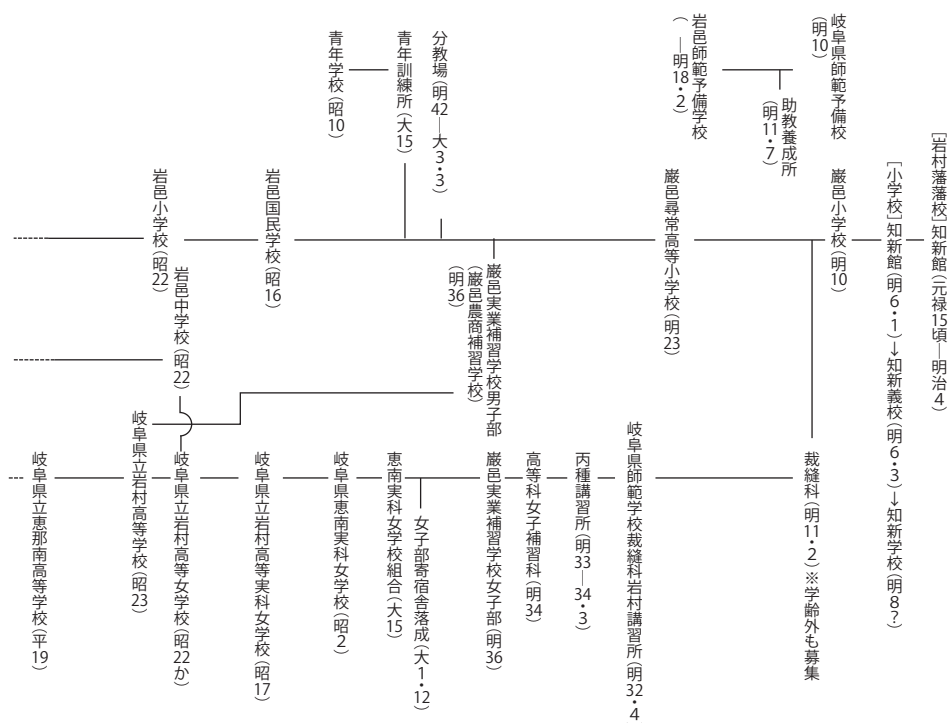


図1 岩村学校変遷図

明治維新後、明治四年（一八七二）に廃藩置県となり、明治五年八月に文部省によつて学制が公布された。岩村藩の時代から藩校の設立も早く、学問を重視して教育行政への対応も早かつた岩村では、藩校であつた知新館が廃止されたのち、この学制の要請に呼応して、明治六年一月小学校が設立された。『岩村町史』には知新館の名を継いで、はじめ「知新義校」、のちに「知新学校」と改称したとある。その後明治十年に「巖イハ邑小学校」と改称した。

明治十一年（一八七八）二月巖邑小学校に裁縫科が設置され、
 学齢以外の生徒も募集した。^{注10}これが岩村における近代女子教育の
 始まりとされる。

明治三十二年（一八九九）四月に岐阜県師範学校裁縫科岩村講習所が置かれ、翌年丙種講習科と改称したが、翌三十四年三月廃止された。これにより講習科の課程に準じた高等科女子補習科が付設された。

明治三十六年（一九〇三）「実業補習學校ヲ改設シ（從來ノ補習科ヲ襲グ）男子部女子部ヲ開始ス教科トシテ修身國語算術実業家事裁縫ヲ教授ス」とある。明治三十七年の「岐阜県學事年報」には明治三十六年設立として「巖邑尋常高等小学校附設巖邑農商補習學校」となっていることから、この年報にある補習學校が男子部となり、それまでの高等科女子補習科が女子部となつたと考えられる。

実業補習学校女子部は、明治四十三年（一九一〇）四月に元葉烟草専売所跡を借り受け移転した。ここで小学校から実質的に分

離独立したことになる。そして、大正元年十二月補習学校女子部寄宿舎が落成した。聞き取り調査によれば、寄宿舎の場所は、現在国道363号線と岩村本通りが交差する附近で、当時そこには公民館、町役場もあり、公民館に隣接していたとのことである。寄宿舎を必要としたことは、通学の困難な遠方から、岩村の実業補習学校女子部で学ぶことを希望する女性がそれなりの人数いたことを示唆する。

大正十五年（一九二六）五月に実業補習学校女子部の校舎が落成し、同年恵南実科女学校組合が設立された。その後、昭和二年四月に岐阜県恵南実科女学校の設立となる。

岩村高等学校の学園史『岩高七十年』の写真には、岩邑実業補習学校最後の卒業生の集合写真が掲載されている。そこに写る教職員と思われる男性六名女性一名は昭和二年四月恵南実科女学校職員となったと記されていることから、実業補習学校女子部から恵南実科女学校へ移管されたものと理解できる。恵南実科女学校は岩村で初めてできた中等教育学校である。

大橋（一九九六）は「教育的にはかなり目覚めた岐阜県の、しかも教育的な中心地であった岩村」であったにもかかわらず、中等学校の設置は、この昭和二年の恵南実科女学校を待たなければならなかった理由について、岩村を取り巻く地形の厳しさを挙げ、そのために交通の便が整っておらず、「大勢の人間を集めることも動かすことも難しい所であった」と分析している。実業補習学校女子部寄宿舎の存在は、岩村に中等教育学校の設置を促したも

のともいえるであろう。

その後恵南実科女学校は、昭和十七年（一九四二）四月に県立岩村高等実科女学校と改称し、終戦後の学制改革により、昭和二十三年（一九四八）県立岩村高等学校に改組された。寄宿舎の閉鎖時期は定かでないが、同校を昭和二十七年に卒業された高柳喜久江氏によれば、在学当時にはまだ寄宿舎があったかもしれない。また実際に寄宿舎が使われていたかもしれないとのことであった。女子の寄宿舎は実科女学校時代に校地内に増設されていたので、高柳氏のお話にある寄宿舎が実業補習学校時代のものであるかは不明である。平成十九年、県立岩村高等学校と県立明智商業高等学校が統合し、県立恵那南高等学校となつて現在に至る。

4 下田歌子と千歳倶楽部の関わりについて

巖邑実業補習学校女子部を母体とする恵南実科女学校と下田歌子の関わりは深い。同校の校歌は下田の作詞であり、三代目校長の浅野とくが下田に校歌の作詞を依頼したとされ、下田歌子顕彰碑の除幕式当日に初めて校歌が歌われた（鈴木隆一・田口修二〇二二）。また、校旗は「昭和5年に生徒が実習で養蚕製糸を行ったもので絹布を織り、下田歌子の校名揮毫」であった（大橋（一九九六））。大橋は「岩村の実科女学校は、尊敬すべき郷土の教育者下田歌子の教育思想を実践しようとした趣きがある」とし、想像の域としながらも、浅野とくが、まさにその教育方針を担つ

た人物であつたろうとしている。

このように、恵南実科女学校と下田の関わりは知られているが、それ以前の実業補習学校女子部との関わりを示す資料はこれまで確認されてこなかった。今回の二点の書幅のうち書幅①は、間接的ではあるが、千歳倶楽部が介在して下田と実業補習学校女子部を関係付けるものである。では、どのような経緯で下田歌子直筆の歌が書かれた書幅が千歳倶楽部員への記念の品となったのだろうか。

今回の調査ではその橋渡しをした人物を特定できる資料は見いだせなかったが、その可能性が高い人物について述べる。

千歳倶楽部の一員である小出熊藏の御令孫の小出剛三氏（株式会社コイデカメラ社長）より、熊藏の妹勢ん（明治二十一年八月生）が「当時の田舎では珍しいお茶の水の女高師に遊学」し、「郷里の大先輩下田歌子に認められその紹介で巖本捷治と添うことになる」という剛三氏の兄良藏氏によつて書かれた家系冊子からの情報をいただいた。勢んは明治四十年から同四十四年、女子高等師範学校（東京女子高等師範学校）技芸科に在籍し、明治四十四年の卒業後は、和歌山県新宮高等学校教諭兼舎監となった。また、小出勢んは一時下田の家に同居していた。^{注14}

夫となつた巖本捷治は、東京藝術大学音楽学部の前身である東京音楽学校を卒業し、雑誌「音楽之友」を創刊して初代主幹となつた人物である。^{注15}戦後は岩村に移り住み、昭和二十四年から二十八年にかけて岩村高等学校の音楽講師も務めている。^{注16}兄の巖本

善治（文久三年（一八六三）―昭和十七年（一九四二））は女子教育者で、「女学雑誌」の刊行や、明治女学校校長を務めた。妻の若松賤子は『小公子』の翻訳者として知られる（廣野幸一（二〇一〇））。
下田と小出熊藏、勢んとの交流を示唆する写真を提示する（図2）。



図2 巖本捷治・小出勢ん結婚式（水野家所蔵）

これは小出熊藏の弟卯一郎が預けられていた水野家（水野薬局）に所蔵されているもので、巖本捷治と小出勢んの結婚式の際に撮

られた写真である。本学図書館下田資料には、同写真の複写があるが、写真上部の人物名は写されていなかった。今回、水野家当主の水野清彦氏に原本を閲覧・複写させていただき、後列に小出熊藏の記載が認められた。これにより、下田と小出熊藏、勢んが同席していたことが確認できた。

写真には、東京音楽学校初代校長の伊沢修二夫人や同校出身の作曲家の小山作之助夫妻、巖本善治、巖本の長女清子の名も見える。日付は大正二年七月二十一日となっている。

兄の巖本善治と下田との関係を示す書簡も存在する。書簡に「弊校十周年を御いわひ被下」とあることから、実践女学校、女子工芸学校設立十周年の明治四十二年のものと考えられ、巖本の「御令嬢方」が在籍していたことが読み取れる。下田は娘たちが母（若松賤子）を亡くしたことをいたわしく思い、その行く末についても巖本と相談したいと書いている。ご寄贈者の廣野幸一氏は巖本善治の長女清子の御令孫で、廣野氏の著書（廣野（二〇一〇）のあとがきで「巖本善治、若松賤子の長女である中野清子」は、「私の母（廣野登志）の話で、実践女子専門学校の英語教師に就任し、実践の下田歌子先生が自分の後任にするところ、結婚により断念したとのことで、その後実践同窓会の会長を永らく務めていました」と書かれている。清子氏は明治四十三年専門学校家政科を卒業し、客員（旧職員）にも掲載されている（『会員名簿（A）』）。同窓会長としては、桜同窓会が学園組織より自立し、会員が会長を選出するようになってからの第二代から第六代まで（一九五四

年七月～一九六四年四月）の会長を務めている。^{注19}

下田は、女子高等師範学校において優秀な生徒であった同郷の小出勢んと、娘の教育を託された親しい間柄であった巖本善治の弟捷治の結婚を取り持ったと考えられる。

このことから、郷土出身の女子教育者として名高く、妹の仲人でもある下田歌子に、兄の小出熊藏本人が、あるいは勢んを通じて、岩村に落成した巖邑実業補習学校女子部寄宿舎建設功労の記念とするため和歌の揮毫を依頼したとしても不自然ではない。

5 書幅の和歌について

書幅①に書かれた歌は、『香雪叢書 第二巻』「雪の下草」に所収されている。ここには詞書があり、

體育奨励のころを人のよませけるに

くろがねのかたき心は劔太刀きたへたるみに宿るなりけり

となっている。同歌の書かれた別の書幅の存在は下田資料（二〇六七）で確認できる。歌は次の通りであるが、複写資料で、原本は実践桜会所蔵となっているが、残念ながら現在、原本の確認はできない。

黒かねのかたきころはつるき太刀／

きたへたるみにやとるなりけり

歌子

「雪の下草」所収歌からは、この歌が体育奨励を詠んだものであることがわかる。書幅①が初出であるかは不明だが、歌意は下田が体育奨励について述べた「女子の體育に就きて」の中に見える「諺に云ふ、強健なる身體には、能く強健なる精神宿る」とほぼ同義と考えられる。

下田が学監を務めた華族女学校は、通則に「教育ノ趣旨ハ羣倫ヲ本トシテ知識ヲ發達セシメ高尚ナル性情ヲ養ヒ身體ヲ強壯ナラシメ上流ノ賢母良妻タルベキ者ヲ陶冶スルニアリ」とあるように、知育・徳育とともに体育が重視されていた。^{注20}それゆえ創設当初から体操が取り入れられ、明治二十年より普通体操の授業が開始され、明治二十七年からは運動会も開催していた。^{注21}荒井啓子（二〇二一）は、下田自身、欧米教育視察によつて「ここで目にした欧米の女学校の体育教育についても様々な知見を持ち帰つたとされる」と指摘している。また、香川せつ子（二〇二二）は下田の体育奨励を、国家主義的な教育との結合として、国力への影響を重視したとする。

巖邑実業補習学校女子部が改設された明治三十六年には、高等女学校要目で体操が正式教科の一つとなつたが（香川（二〇二二））、前年の明治三十五年に改正された実業補習学校規程には体操に相当する科目の記載は見られない。^{注22}

すでに、欧米教育視察以前に、下田は日記の中で「自分胆に命じて、勉めて、下民の女子教育の手段にかゝらんとす」と記し、欧米教育視察の知見を得ることよつて、下田が目指す女子教育の

構想が具現化され、帰国後の明治三十一年、帝国婦人協会設立に至つたと考えられるが（愛甲（二〇一七））、その教育部門として設立した実践女学校・女子工芸学校においても、設立当初は実学の習得を目的とする工芸学校のほうには、体操の科目は設置されていなかった。明治四十三年（一九一〇）「高等女学校令及同施行規則」の改正により実科高等女学校の設置が決まり、これにより、再編された実科高等女学校課程に毎週三時間の体操が組み込まれる。書幅①は、故郷岩村での実業補習学校女子部の寄宿舎落成に際し、女子教育における体育の重要性を強く認識していた下田の思いを含んで選ばれた歌であつたとも考えられる。

書幅②の「あだし世の風にたわむなひめこまつ ゆつ岩むらにねざしかためて」の歌は、このほかに同歌の書かれた資料を現時点で確認できない。

歌の内容から考えると、学校に学ぶ児童生徒になぞらえて「小松」「姫小松」と使われる例は、下田が作詞を手がけた岐阜県東濃地域の校歌にも見受けられる。巖邑尋常高等小学校（現、恵那市立岩邑小学校）昭和五年（一九三〇）制定の校歌では「ゆるぎなき湯津いはむらの とこしえに 教えの庭も 開けそわなん しげれただ 御代の恵みの 雨にきる 美濃の小山の 小松 若竹」と歌われている（鈴木・田口（二〇二二））。

書幅②の歌も、姫小松になぞらえた若い人たちに向けて、儚い世の中の困難にも負けることなく、この岩村にしつかりと根ざしてほしいという願いが込められている。そのように考えると、教

育関係に対して行われた寄附の記念として書かれた歌であろうと推測される。

書幅①との形態の類似性や、箱書にある年月が書幅①の「我千歳倶楽部曩建設嚴邑實業補習学校寄宿舎時」の年月と同じであることから、千歳倶楽部が寄宿舎を建設するための寄附とも考えられるが、「従三位歌子」とあることから、書幅①との違いもあり、箱書だけで断定することは難しい。今後の継続調査の課題としたい。

おわりに

今回の調査で、明治四十二年に岩村で設立された、千歳倶楽部という団体の存在が明らかとなった。この団体の部員は、そのほとんどが岩村町本町を中心とした地域で主に商売に携わる若い世代の、地元で有力な当主の集まりであつたと考えられる。

千歳倶楽部は嚴邑実業補習学校女子部寄宿舎建設に、地元岩村のための社会貢献を目的として関わつたと推測される。寄宿舎建設に特に尽力した千歳倶楽部員に対して、その功労を記念して贈られた書幅は、岩村出身の女子教育者下田歌子の揮毫で、体育奨励を詠んだ歌が書かれていた。また、千歳倶楽部員がおそらく教育関係の事業に対して行つたと思われる寄附行為の記念としても、下田の書幅が贈呈された。

また、千歳倶楽部員の小出熊藏の妹勢んはこの書幅が贈呈された同時期に下田の媒酌で結婚し、下田と小出熊藏、勢んの接点も

確認できた。これにより、小出熊藏、勢んを通じて寄宿舎建設功労記念の和歌揮毫の依頼があつた可能性が考えられる結果となつた。このことは、大正二年頃に下田が岩村の人々と関わりを持つていたことを示す具体的な証拠といえる。

岩村の地は、岩村藩の時代から学問を重視し文教の盛んな土地柄であり、その地で生まれ、祖父も父も儒学者の家庭に育つた下田歌子は上京後の宮中出仕で特に歌の才能を認められ、宮中を辞した後は近代女子教育者としての道を歩んだ。

他方、明治維新後の岩村では、幕藩時代の遺風をうけて明治五年の学制公布によつて設立した初の小学校を藩校の名を受け継いで「知新館（知新義校・知新学校）」とし、就学率も高く、教育水準も周辺地域の中で群を抜いて高かつた。中等教育機関である実科女学校の設置には時間を要したが、それまでの間に、小学校に裁縫科が併設され、岐阜県師範学校裁縫講習所が置かれ、明治三十六年に実業補習学校女子部・男子部が改設された。遠方から就学を希望する女子のために寄宿舎が必要となり、寄宿舎が建設され、落成したのが大正元年十二月である。新出資料により、ここを下田と岩村との一つの接点を見いだすことができた。

故郷岩村に、女性が実学を習得し自活の道を開ける教育機関が設置され、そこに遠方からも学ぼうと熱意を持った生徒が集まることは、下田にとつても喜ばしいことであつたに違いない。

今回の調査では多くの方々のご協力で証言や情報をいただいたが、まだ不明な点も多く、千歳倶楽部と下田歌子との関わりも一

つの可能性を示したに過ぎない。巖邑実業補習学校女子部との関わりも間接的なことのみである。今後も調査を継続し、下田歌子と岩村の関わりがさらに明らかになることを期待したい。

謝辞

本調査に際し、左記の関係諸氏ならびに機関より多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

〔所蔵書幅調査、聞き取り調査等〕

鈴木隆一氏 渡会加代子氏 渡会利夫氏

〔資料提供、聞き取り調査等〕

小出剛三氏 高柳喜久江氏 松井みさ子氏 水野清彦氏
(高柳喜久江氏より、「天橋立」での千歳倶楽部員十三名の写真画像及び「常磐倶楽部」「同年会」と書かれた写真画像もご提供いただき、「千歳倶楽部」以外の団体の存在も明らかになりました。)

〔資料情報提供、聞き取り調査等〕

元中部大学助教授大橋和華氏、荻野裕代氏、荻山善藏氏 可
知取氏 勝川哲男氏 神谷敏行氏 杉本宗穂氏 鈴木和代氏
チャー志帆氏 土岐幸枝氏 中根繁氏 西尾公男氏 藤井志朗

氏 藤井雅子氏 矢野吉貴氏、山村善保氏 渡曾延彦氏 渡
曾直子氏 実践女子大学下田歌子記念女性総合研究所客員研究
員・NPO法人いわむら一斎塾若森慶隆氏
岐阜県歴史資料館 岐阜県立恵那特別支援学校 岐阜大学教育
学部郷土博物館

〔資料閲覧、複写等〕

恵那市立岩邑小学校校長大島明浩氏、岐阜県立恵那南高等学校
校長高橋俊和氏、同教頭柴成吉氏
実践女子大学・実践女子大学短期大学部図書館 実践女子大学
下田歌子記念女性総合研究所

*

岩村でのこれまで十余年の調査に際し、常に惜しみなく資料を
ご提供くださり、ご指導ご協力いただいた西尾精二氏が本年
九月に逝去されました。今回の調査でも、多くのご教示を賜り、
ご著書からも重要な情報を数多くいただきました。改めて深く感
謝申し上げます。

注

1

「建碑式参列記」『なよ竹 第二十四號』五十四頁。(奥付の刊行年は
昭和十年となっているが正しくは昭和十一年である)。また、本文

- 中にある旅館名の大黒屋は、大徳屋のことと考えられる。
- 2 『いわむら郷土読本 総括編』七十一―七十四頁。
- 3 熊藏は明治三十三年（一九〇〇）に「父馬次郎の始めた商いを再興する形で、独立創業し、塩味噌、精米から、のちに肥料米穀を商う」（小出良藏氏による「家系冊子」参照）。
- 4 『歴史掘りおこし読本 第三巻』一〇八頁。
- 5 同注4 一〇九―一一〇頁。
- 6 同注2 八十一頁。
- 7 『歴史掘りおこし読本』一七頁。
- 8 『岩村町史』四七四頁。
- 9 同注8 五九五頁。
- 10 『巖邑尋常高等小學校沿革誌』には「學齡外ニテ同科専修生徒ヲモ募集」とある。
- 11 『學校沿革誌 岩邑國民學校』。
- 12 岐阜県立恵那南高等学校所蔵の岐阜県恵南實科女學校関係書類の中に、校地内の寄宿舎が記された図面がある。聞き取り調査でも、校地内に寄宿舎があり、のちに調理室等の教室として使用されたとの証言があった。寄宿舎は実業補習学校女子部寄宿舎が第一寄宿舎、男子用の寄宿舎が第二寄宿舎で、殿町にあった。校地内の寄宿舎は女子用で第三寄宿舎と呼ばれていた。
- 13 女子高等師範学校（一九〇七）東京女子高等師範学校（一九〇八、一九一〇、一九一一）。
- 14 『歲月 昭和世代の覚え書き』二八二頁。著者の水野恭平氏は水野家の現当主水野清彦氏の親族である。
- 15 「巖本捷治・勢ん結婚式」実践女子大学・実践女子大学短期大学部

引用・参考文献

- 16 図書館下田歌子関係資料（出納番号四五二二）（以下 下田資料、出納番号は番号のみ表記 解説文参照）。
- 17 『岩高七十年』一六五頁、同注14 二八三頁。
- 18 同注15。
- 19 「下田歌子差出書簡巖本善治宛（複写…廣野幸一氏寄贈）」（実践女子大学下田歌子記念女性総合研究所所蔵）。
- 20 一般社団法人教育文化振興実践校会HP 歴代理事長 (http://www.i-sakura.org/contents/about/honbu/r_001.html)。
- 21 『女子學習院五十年史』二二六頁。
- 22 同注20 二三八頁。
- 23 官報 第五五七号（明治三十五年一月十五日）。
- ・ 下田歌子（一九〇一）「女子の體育に就きて」『日本婦人 第二十号（明治三十四年六月二十五日）』
- ・ 女子高等師範学校（一九〇七）『女子高等師範学校一覽（自明治四十年四月至明治四十一年三月）』
- ・ 東京女子高等師範学校（一九〇八）『女子高等師範学校一覽（自明治四十一年四月至明治四十二年三月）』
- ・ 東京女子高等師範学校（一九一〇）『女子高等師範学校一覽（自明治四十二年四月至明治四十三年三月）』
- ・ 東京女子高等師範学校（一九一一）『女子高等師範学校一覽（自明治四十四年四月至明治四十五年三月）』
- ・ 下田歌子（一九三二）『香雪叢書第二卷 雪の下草』実践女学校出版部 二四五頁

- 女子學習院（一九三五）『女子學習院五十年史』
- 實踐女學校櫻同窓會（一九三六）『なよ竹 第二十四號』 五四頁
- 社団法人桜同窓會（實踐女子学園）（一九六二）『會員名簿（A）昭和三十六年九月』
- 岩村町史刊行委員會編（一九七七）『岩村町史』三版 岐阜県岩村町役場
- 『調査研究報告 第2号』（一九八一）国文学研究資料館文献資料部
- 大橋和華（一九九六）「岩村に於ける近代の女子教育―恵南（岩村）実科女学校―」『日本通信（4）』中部大学女子短期大学日本語文化センター 六二―六八頁
- 岐阜県立岩村高等学校創立七〇周年記念誌編集委員会（一九九八）『岩高七十年』
- 吉岡幸雄（二〇〇〇）『日本の色辞典』紫紅社
- 歴史掘りおこし委員会編（二〇〇八）『歴史掘りおこし読本』城下町ホットいわむら（岩村町まちづくり実行組織）
- 廣野幸一（二〇一〇）『明治の女学』巖本善治・若松賤子夫妻』岩波ブックセンター
- 水野恭平（二〇一一）『歲月 昭和世代の覚え書き』
- 歴史掘りおこし委員会編（二〇一一）『歴史掘りおこし読本 第三巻』城下町ホットいわむら（岩村町まちづくり実行組織）
- 西尾精二編（二〇一五）『いわむら郷土読本 総括編』いわむら郷土読本編集委員会
- 愛甲晴美（二〇一七）『実践女子大学図書館蔵 下田歌子自筆日記について（三）明治二十三年の概要』下田歌子研究所年報 女性と文化 第三号 一一七―一二二頁
- 荒井啓子（二〇二二）『華族女学校における体育・スポーツ教育の先

- 駆的発展と下田歌子』『実践女子大学下田歌子記念女性相互研究所研究叢書Ⅰ 下田歌子と近代日本 良妻賢母論と女子教育の創出』勁草書房 六九―七〇頁
- 香川せつ子（二〇二二）「イギリス女子身体教育の日本への伝播―下田歌子と安井てつの視察・留学を中心に―」『日英教育研究フォーラム 二十五号』五五、五八、六一頁
- 鈴木隆一・田口修（二〇二二）「下田歌子が作詞した岐阜県東濃地域の校歌に関する調査報告」『実践女子大学下田歌子記念女性総合研究所年報 第八号』七十七―九十七頁
- 『学校沿革誌 岩邑國民學校』岩邑小学校所蔵
- 『巖邑尋常高等小學校沿革誌』岩邑小学校所蔵

あいこつ・はるみ／下田歌子記念女性総合研究所 客員研究員

The Relationship between the Chitose Club and Utako Shimoda:
An Investigation of Shimoda's Handwritten Hanging Scrolls Recently Found in Iwamura-cho,
Ena City, Gifu, and the Activities of the Chitose Club

AIKO Harumi

An investigation in 2022 revealed two hanging scrolls written by Utako Shimoda. It also showed that the Chitose Club was present in Iwamura. This paper reports on an investigation of the Chitose Club and the relationship between Shimoda and the club.

The results show that these scrolls were presented to members of the Chitose Club in January 1913. One of authenticated note shows that the club contributed to the building of a dormitory for the Women's Section of Iwamura Technical Continuation School, which was completed in December 1912. The investigation further showed that there were 15 members in the Chitose Club and that most of them were from the younger generations of important families in Iwamura.

After the Meiji Restriction, Chishinkan Chishin (Giko, Chishin School) was established in Iwamura, Japan. The name was changed to Gan-yu Elementary School, with the kanji meaning of "Iwamura," and a sewing course was established alongside the school. It was the predecessor of the Women's Section of the Technical Continuation School, established in 1903. A dormitory was built for female students living far from the school. The two hanging scrolls were presented to the club members as a memento of the contribution of the dormitory and endowment.

Koide Kumazo, a member of the club, had a younger sister, Sen, who was familiar with Shimoda. Sen got married via Shimoda's match-making around the same time as the scrolls were presented. Shimoda, Kumazo, and Sen are included in some pictures from the wedding ceremony. It is likely that Kumazo or Sen asked Shimoda to write poetry on the scrolls.

The Women's Section of the Technical Continuation School became a Keinan Practical Women's School; this school is known to have had close relationships with Shimoda. This investigation illustrates part of the previously unknown relationship between Shimoda and the predecessor school. The newly discovered materials are remarkable in that they show Shimoda's interaction with people in Iwamura around 1913.